
現代ドイツにおけるトルコ系移民の言語意識

—若者の声を聞いてみて*

田中 翔太

1. ドイツにおけるトルコ系移民の社会的状況と問題点

1.1. ドイツにおけるトルコ系移民の概略史

ドイツは、移民国家である。総人口の約 8071 万人に対して、外国籍を持つ者の人口が 6,927,716 人であり、人口の約 12 人に 1 人が外国籍所有者という計算になる。さらに国籍別に人口を見ていくと、1 位がトルコ人で 1,549,808 人、2 位が 609,855 人でポーランド人、3 位が 552,943 人でイタリア人と続いていく。すなわち外国籍所有者の約 22.4%がトルコ人であり、外国籍を持つ者のなかで、トルコ人がいかに多数を占めているかが分かる (Statistisches Bundesamt 2014b: 37 を参照)。さらにドイツ国籍を取得したトルコ系移民をそこに足すと、約 279 万ものトルコ系移民が現在のドイツに生活していることになる (Statistisches Bundesamt 2014c: 82 を参照)。¹⁾

今日のように多くのトルコ系移民がドイツで生活するに至ったのは、1961 年に旧西ドイツとトルコとの間で締結された、労働協定によるところが大きい。西ドイツは 1955 年にまずイタリアと労働協定を結び、61 年になるとトルコとも同様の協定を結んだ。それ以降、多くの外国人労働者が旧西ドイツへと渡り、1970 年代になるとクルド紛争等の政治的理由から、多くの亡命者がドイツへとやってくる。外国人労働者と呼ばれた者の多くは単身で来独するが、次第に祖国へ残した妻子を呼び寄せ、定住し始める。今日ではトルコ系移民の世代も、第三世代にまで及んでいる。

第一世代の頃は、トルコ系移民の話すドイツ語は、ドイツ社会から「ブロー

* 本論文は、日本学術振興会特別研究員 DC2 (課題番号 26・10205) としての研究成果の一部である。ここに記し、日本学術振興会に謝意を表する。

1) 本論文で調査の対象とする「トルコ系移民」には、トルコ国籍を所有する者と、ドイツ国籍を獲得した者 (トルコの移民背景を持つ者) の両者を含めることとする。

クンなドイツ語 (gebrochenes Deutsch)」(Androutsopoulos 2001: 330) と見なされてきた。しかしながら、トルコ系移民は世代を追うごとに教育のレベルを上げてきつつある。では、第三世代にあたる現在の若者たちは、日常生活におけるみずからの言語使用に対して、どのような意識を持っているのだろうか。彼らの言語意識を明らかにすることが、この論文の目的である。

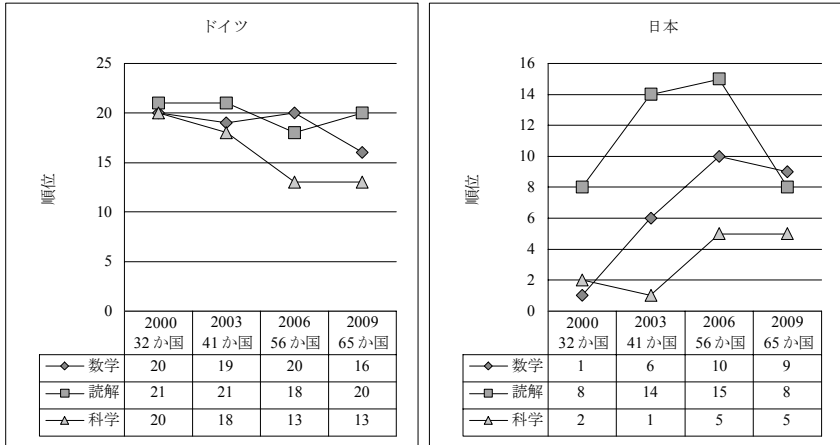
1.2. トルコ系移民が抱える言語と教育問題

トルコ系移民に限らず、移民が話すドイツ語は、ドイツ社会において問題視されてきた。移民のドイツ語運用能力の程度を示す一例として挙げられるのが、2000年にドイツで起きた PISA²⁾ショックである。これは OECD 加盟国が義務教育の終了する 15 歳を対象として行う学習到達度調査のことで、読解力、数学的リテラシー、科学的リテラシーから生徒の学力を評価するものである。ドイツは初回の 2000 年度調査において、先進国のなかで最悪であるという評価をうけた。そのドイツにおいてもっとも悪い成績であった州は、移民がもっとも多く住むノルトライン＝ヴェストファーレン州であり、成績と移民人口の関連性が指摘された。ちなみに同州では、ドイツ全土のおよそ 3 分の 2 にあたるトルコ系移民が生活している。表 1 は、日独それぞれの、2000 年から 2009 年までの学習到達度調査における順位推移をあらわしたものである。この表から分かるように、ドイツは初回の調査こそ悪い成績だったものの、読解力を除き、徐々に順位を上げて来ている。

2) PISA とは Programme for International Student Assessment の略称で、OECD (経済協力開発機構) による学習到達度調査のことを指す。

表 1: OECD 学習到達度調査：日独の順位の推移（2000年－2009年）

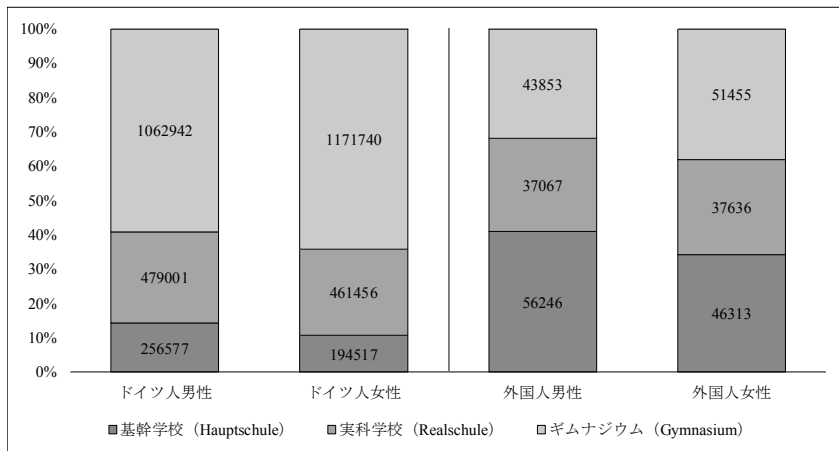
（国立教育政策研究所 2013: 28ff.に基づき筆者作成）



しかし、学習到達度調査の結果こそ良くなっているものの、移民に対する教育については、2014年現在も依然として問題が残っている。次に挙げる表2は、移民背景を持たないドイツ人と外国籍所有者の、基幹学校（Hauptschule）、実科学校（Realschule）、ギムナジウム（Gymnasium）に通う生徒数を、性別ごとにあらわしたものである。なお、グラフのなかに記述した数値は実際の生徒数である。それぞれの比率を見て分かるように、移民背景を持たないドイツ人は、大学進学を目指す者が通うギムナジウムにより多く進学し、外国籍を所有する者は、卒業後に多くの者が働き始める基幹学校により多く通っている。さらに性別ごとに見ていくと、両者とも女性の方が、より多くギムナジウムに通っていることが分かる。そして基幹学校に通う生徒数は、どちらとも男性の方が多い。³⁾

3) このことは、4.3.に記述したアンケート調査の結果とも関連している。

表 2: 性別と国籍別にみた生徒数と比率
 (Statistisches Bundesamt 2014a: 47 に基づき筆者作成)

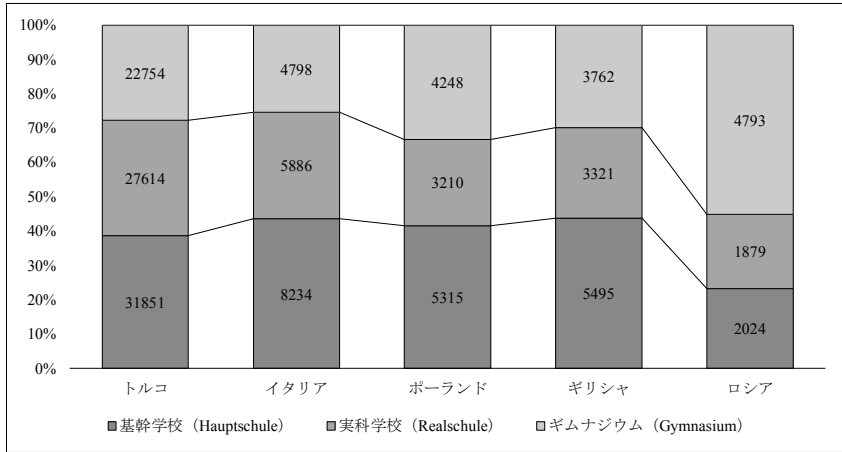


続く表 3 は、外国籍の生徒をさらに出身国別に分析したものである。2014 年現在、トルコ系移民、イタリア系移民、ポーランド系移民、ギリシャ系移民、ロシア系移民の順に生徒数が多いため⁴⁾、表 3 ではこの 5 か国を選んだ。グラフのなかに示した数値は生徒数で、それぞれの出身国ごとにパーセンテージであらわしている。

4) 外国籍の生徒数を国別にみると、トルコ系移民の生徒数が 161,108 人で 1 位である。続くイタリア系移民の生徒数が 38,256 人で 2 位、ポーランド系移民の生徒数が 34,328 人で 3 位、ギリシャ系移民の生徒数が 24,100 人で 4 位、ロシア系移民の生徒数が 21,236 人で 5 位である (Statistisches Bundesamt 2014a: 264f.を参照)。

表 3: 移民背景別にみた生徒数と比率

(Statistisches Bundesamt 2014a: 264f.に基づき筆者作成)



このデータによれば、トルコ系移民とイタリア系移民が各学校に通う生徒数の比率に、ほぼ違いがないことが分かる。したがって、トルコ系移民の教育水準が移民のなかで飛びぬけて悪いとは言えない。このことは、元々移民のなかでも特に低かったトルコ系移民の教育水準が、年々上昇しつつあるという事実と合致する。⁵⁾

2. これまでのトルコ系移民に対する言語意識調査

2.1. 先行研究

トルコ系移民の言語使用に関する調査は、林 (2001, 2003, 2008) がすでに行っている。林は2000年12月18日(月)から2001年1月9日(火)にかけて、ベルリンのクロイツベルク地区にある総合学校 (Gesamtschule) においてアンケートを実施した。

林は7年生2クラス、8年生2クラス、9年生2クラス、10年生1クラスの

5) データとしては最新ではないが、2000/2001年度と2006/2007年度のトルコ系移民の就学率を考察すると、基幹学校への進学率は男性が-0.2%、女性が-2.2%の減少である。同様に実科学校への進学率は男性が-2.1%、女性が-3.0%減少している。反対にギムナジウムへの進学率は男性が+4.6%、女性が+3.3%と増加しており、このことから、6年のあいだにトルコ系移民全体の教育水準の底上げが起こっていることが分かる (Siegert 2008: 26 を参照)。

計7クラスでアンケートを行い、対象者数の合計は116名であった。各年齢および性別における詳しい人数は、表4で示したとおりである。

表4: 林調査によるアンケート結果 (N=人数) (林 2008b: 7)

		性別				合計	
		女性		男性			
		N	%	N	%	N	%
年齢	12歳	2	33.3%	4	66.7%	6	100.0%
	13歳	16	59.3%	11	40.7%	27	100.0%
	14歳	14	46.7%	16	53.3%	30	100.0%
	15歳	18	75.0%	6	25.0%	24	100.0%
	16歳	11	55.0%	9	45.0%	20	100.0%
	17歳	2	28.6%	5	71.4%	7	100.0%
	18歳	1	100.0%	0	0.0%	1	100.0%
	不明	1	100.0%	0	0.0%	1	100.0%
合計		65	56.0%	51	44.0%	116	100.0%

この調査で林は、トルコ系移民の生徒のみずからの「言語能力に関する自己評価」(林 2003: 39)を明らかにしようと試みた。アンケートの内容は大きく分けて、日常生活とトルコとの関わり、日常生活における言語使用、個別の状況ごとにおける言語使用の3点から構成されている。日常生活における言語使用という観点からは、例えば家族の誰と何語で話すのか、家族以外の人物と何語で話すのか等を問うた。そして、状況別の言語使用については、主に「計算するとき」と「夢を見るとき」の言語について質問している。そして著書の中かで上述の「言語能力に関する自己評価」に関しては、以下のような結論に達している。林調査では、日常生活においてトルコとのつながりが弱い生徒ほど、トルコ語への強いこだわりを持つ可能性が明らかとなった。そのため林は、「ドイツ社会への順応が進みトルコとのつながりが薄れることが、かえってトルコ語への関心を喚起することになると解釈することができるだろう」(林 2003: 41)と結論づけている。

2.2. 本論文における調査の意義と新たな問題提起

林調査からおよそ 12 年経った現在、トルコ系移民の若者の言語意識にどのような変化が見られるのだろうか。本調査では、特に林によるアンケート調査よりも詳細な質問事項を設けることで、それぞれの質問項目間の関連性を見出すことを目指した。その点を考慮した上で立てた問題提起が、次の 2 点である。

- A) およそ 12 年前に行われた林調査と比較して、トルコ系移民の若者の言語使用に関して変化がみられるか。
- B) もしトルコ系移民の若者の言語使用に変化が見られた場合、それはどういったコミュニケーションの相手、あるいは状況においてか。また、どのような言語意識が働いているため、言語使用に変化が生じたと推論できるか。

3. アンケート調査

3.1. 実施の概要

まず今回のアンケートを実施するにあたり、調査をする場所の選定にあたった。学校でアンケート調査を行う場合、州ごとに定められた規定に基づき、さまざまな制約が設けられることが多い。そのため今回は、学校以外の場所でトルコ系移民の少年少女が集まる場所、すなわち青少年センター⁶⁾ (Jugendzentrum、Jugendhaus、Jugendtreff) に着目した。ドイツ全土のなかからオンライン上で情報を公開している施設に限定した。その中からアンケートの内容および実施日程に対して同意を得られた 5 つの施設を、今回の調査対象とした。

6) 本論文では、Jugendzentrum や Jugendtreff、Jugendhaus 等を便宜的にまとめて「青少年センター」と訳した。それぞれの施設が公開している情報をもとに、幾つかの共通点があると考えたからである。この施設の機能をまとめると、以下のような役割を果たす場所であることが分かる。

- 1) たいていの場合、平日の一定時間のみ開館している。
- 2) 市の自治体や教会等により運営されている。
- 3) 学校の授業が終わった 10 代の少年少女たちが集まる施設である。
- 4) この施設では、ゲームやインターネット、室内スポーツ等、様々なアクティビティを行うことが可能である。
- 5) さらに、学校の宿題を手伝う施設もある。
- 6) 特定の日を設け、施設に通う児童たちと遠足を行うこともある。
このことから、おおよそ日本の学童保育に似た性質を持つ施設だと位置づけることができるであろう。

調査都市を今回は全 5 都市（ベルリン、ハンブルク、ケルン、マンハイム、ルートヴィヒスハーフェン）に限定した。この 5 都市を選んだ理由は、それぞれの都市に生活するトルコ系移民が、外国籍所有者の人口のなかで最も多いということを前提条件としたからである。⁷⁾

なお、実施期間については表 5 のとおりである。また対象者は、基幹学校、実科学校、ギムナジウム、総合学校に通うトルコ系移民の男女のうち、12 歳以上の者とした。なお、青少年センターには色々な民族背景を持つ生徒が通っているため、トルコ系移民と言いつつも、例えばドイツ人とのハーフやブルガリア系移民とのハーフも存在した。今回の調査の主旨が「トルコ系移民」の言語意識を探ることであったため、ハーフやクォーターは対象から除外した。その結果集まったのが、50 人の調査対象者である。この数はアンケート調査としては多いとは言えないが、あくまで今回はアンケート調査の初回であり、パイロット調査と位置づけて行った。

表 5: アンケートの実施概要

1) 期間	2013 年 3 月 8 日（金）～19 日（火）
2) 都市	全 5 都市（ベルリン、ハンブルク、ケルン、マンハイム、ルートヴィヒスハーフェン）
3) 施設	青少年センター（Jugendzentrum, Jugendhaus, Jugendtreff） 但し、ケルンのみ実科学校にて実施。 ⁸⁾
4) 対象	基幹学校、実科学校、ギムナジウム、総合学校に通う、12 歳から 23 歳のトルコ系の男女、計 50 名。 ハーフやクォーターの生徒は、対象から除外する。

7) ベルリンにおけるトルコ籍所有者の割合は、外国籍所有者の 22.7%を占めている。続いてハンブルクにおけるトルコ籍所有者は外国籍所有者の 19.5%、ケルンにおいては 31.6%、マンハイムでは 25.2%、ルートヴィヒスハーフェンでは 25.8%である（Statistisches Bundesamt 2014b を参照）。

8) この理由は、日本に帰国したあとに、ケルンのある青少年センターから、ある実科学校を紹介する旨のメールを受け取ったからである。それゆえ、ケルンのみメールにてアンケート用紙を PDF ファイルで送付し、学校で教師の監視下のもとアンケートを行ってもらった。実施条件としては、他の青少年センターと同様である。

3.2. アンケート実施の施設と条件

本調査を行ったのは、3.1.で述べたように、青少年センターが 5 館、そして実科学校が 1 校である。

- 1) DTK Wasserturm Jugend-, Kultur- und Kommunikationszentrum (ベルリン/ク
ロイツバルク地区)
- 2) Schorsch - Haus der Jugend St. Georg in St. Georg (ハンブルク/ ザンクト・
ゲオルグ地区)
- 3) Jugendhaus - St. Pauli Kirche (ハンブルク/ ザンクト・パウリ地区)
- 4) Konrad-Adenauer-Realschule Köln (ケルン/ インネンシュタット地区)
- 5) Jugendtreff Neckarau (マンハイム/ ネッカラウ地区)
- 6) Jugendtreff Westend (ルートヴィヒスハーフェン/ ミッテ地区)

アンケートを実施するにあたり、まずはアンケート用紙をドイツ語とトルコ語の 2 通りで用意した。そして調査対象となるトルコ系移民の若者が、どちらか答えやすい言語を選べるようにした。実施者である著者がそれぞれの施設に直接赴き、アンケートを行う意思のある若者に用紙を手渡した。実施者は被験者のアンケート回答中は常に傍に待機をし、被験者に質問や疑問点がある場合は、その場で回答した。アンケート用紙は全 4 ページからなっており、回答時間は平均しておおよそ 10 分程度であった。回収も実施者自身が行った。⁹⁾

4. アンケート結果の分析

4.1. 回答者

3.1.で、アンケート回答者数が 50 名集まったことを記した。しかし、アンケート結果を集計していく過程で、分析対象として有効なアンケートが全部で 30 件にまで減少した。¹⁰⁾有効な 30 件のアンケートの具体的な回答者数は、次の表

9) アンケートの具体的な内容については、論文の末尾にドイツ語版(資料 1)と日本語訳(資料 2)を付記している。

10) その理由として、質問への回答の仕方が挙げられる。例えば資料にある質問 5)のように、日常生活において使用する言語を 5 択から選ぶ質問において、「はい」「いいえ」で回答する生徒がいたからだ。この傾向は、とりわけ筆者がその場で立ち会うことが

6に示したとおりである。表6では、回答者の年齢を男女別に集計している。

表6: アンケート回答者数 (N=人数)

		性別				合計	
		女性		男性			
		N	%	N	%	N	%
年齢	12歳	0	0.0%	3	100.0%	3	100.0%
	13歳	4	80.0%	1	20.0%	5	100.0%
	14歳	2	25.0%	6	75.0%	8	100.0%
	15歳	2	100.0%	0	0.0%	2	100.0%
	16歳	0	0.0%	3	100.0%	3	100.0%
	17歳	0	0.0%	3	100.0%	3	100.0%
	18歳	1	20.0%	4	80.0%	5	100.0%
	23歳	0	0.0%	1	100.0%	1	100.0%
合計		9	30.0%	21	70.0%	30	100.0%

回答者の男女比は、男性21名、女性9名である。また、年齢については12歳から23歳まで、比較的均等に分配されている。

4.2. 回答者が選択したアンケート用紙の言語の変化

まず、回答者が選んだアンケート用紙の言語に注目したい。表7では、本調査で回答者が選択したアンケート用紙の言語を年齢別にまとめている。意外なことに、全30名の回答者のうち、トルコ語のアンケート用紙を使用したのは1名しかいなかった。特にベルリンのクロイツベルク地区のような、トルコ系移民が独自の共同体を形成している地区では、日常生活においてもトルコ語が多用され、彼らのドイツ語運用能力に問題があるということがたびたび先行研究で指摘されていた。しかし実際にアンケートを行うと、どの都市においても、ほぼドイツ語を選ぶ生徒ばかりであった。

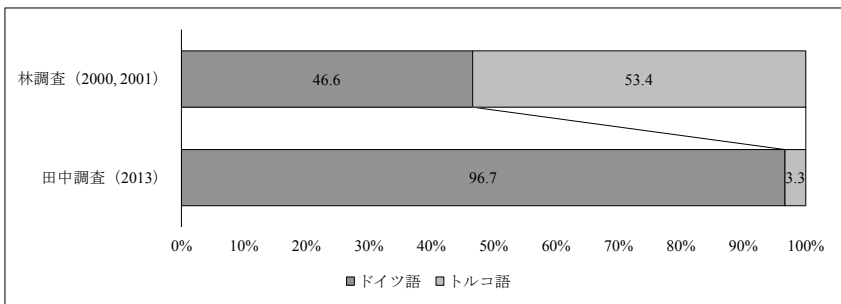
できなかったケルンの調査において、顕著に見られた。

表 7: 回答者が選んだアンケート用紙の言語

		回答言語				合計	
		ドイツ語		トルコ語			
		N	%	N	%	N	%
年齢	12 歳	3	100.0%	0	0.0%	3	100.0%
	13 歳	5	100.0%	0	0.0%	5	100.0%
	14 歳	7	87.5%	1	12.5%	8	100.0%
	15 歳	2	100.0%	0	0.0%	2	100.0%
	16 歳	3	100.0%	0	0.0%	3	100.0%
	17 歳	3	100.0%	0	0.0%	3	100.0%
	18 歳	5	100.0%	0	0.0%	5	100.0%
	23 歳	1	100.0%	0	0.0%	1	100.0%
合計		29	96.7%	1	3.3%	30	100.0%

しかし 12 年前に行われた林調査では、まったく異なる傾向が見られた。全 116 名の回答者のうち、トルコ語のアンケート用紙を選んだ生徒数が 62 名と、半数を超えたのである。アンケート用紙の言語選択の推移をパーセンテージであらわしたのが、下の表 8 である。この表を見ても明らかのように、この 12 年のあいだに、ドイツ語のアンケート用紙で回答する者が大幅に増加した。

表 8: アンケート回答言語の推移



本論文では多くの数値を扱うが、それぞれの分析結果の裏付けをするために、R という統計解析ソフトを使用した。¹¹⁾このソフトウェアを使用することで、

11) このソフトウェア分析の際に、陳姿因氏（東京大学大学院）と安部健太氏（学習院

アンケートの結果をパーセンテージで比較しただけでは分からない、数値の有意性や質問間の相関性が明らかになるためだ。¹²⁾

まずは 12 年のあいだのアンケート回答言語について、カイ二乗検定を行うことで、その推移を考察した。林調査においてドイツ語で答えた人数とトルコ語で答えた人数、さらに本調査においてドイツ語で答えた人数とトルコ語で答えた人数をカイ二乗 (χ^2) 検定に掛けると、次のような結果が導かれる。

$$\chi^2 \text{ 値} = 22.40、$$

$$p \text{ 値} = 2.21 \times 10^{-06} < \text{有意水準}^{13)} \alpha = 0.05$$

すなわち、12 年のあいだでアンケート回答言語に推移があるといえる。

4.3. 家族に対して使用する言語

次に考察するのは、回答者が家族に対して使用する言語の結果である。この項目では、「祖父」、「祖母」、「父親」、「母親」、「兄弟」、「姉妹」の 6 項目を設け、それぞれ該当者が家族のなかにいる場合に回答させるようにした。回答は言語使用の頻度を問うもので、「トルコ語のみ」、「どちらかというトルコ語」、「トルコ語とドイツ語半々」、「どちらかというドイツ語」、「ドイツ語のみ」の 5 択から選択できるように設定した (表 9)。この項目に関しては、想定していた通りの傾向を観察することができた。例えば祖父や祖母といった移民の第一世代にあたる人物と話すときは、「トルコ語のみ」と回答する者が 8 割強いた。しかし家族内でのトルコ語の使用は、話す相手が移民の第二世代に該当する両親になったときに 5 割弱までに減少し、第三世代の兄弟姉妹が話し相手になると、ほとんど「トルコ語のみ」と回答した者はいなかった。兄弟姉妹が話し相手の

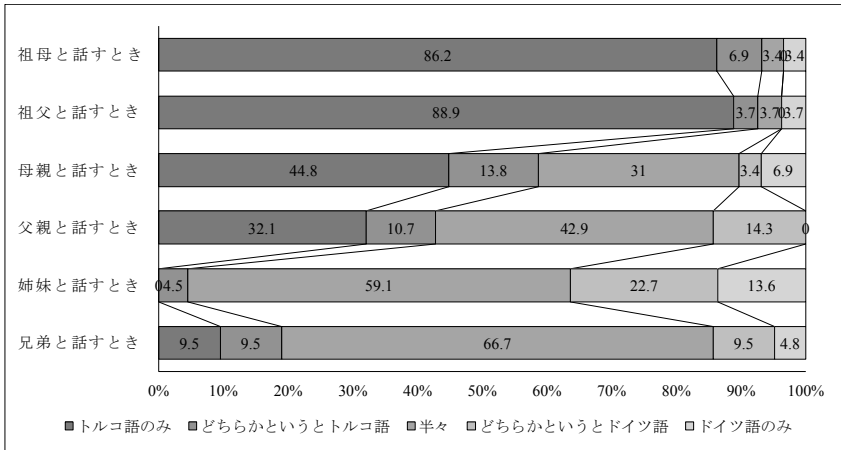
大学大学院)に多くの助言をいただいた。この場を借りて、心よりお礼申し上げます。

12) 統計解析ソフト R を用いて、A と B のカテゴリ間に関連の有無があるか、あるいは A と B のカテゴリ間に差異があるかを検定する「カイ二乗検定」や、A、B、C と様々にあるカテゴリ間の相関性を簡潔に図式化することが可能である「コレスポンデンス分析」を行うことができる。

13) 有意水準の数値は、社会学の分野で同様のアンケート調査を行っている先行研究を参考にし、0.05 と設定した。カイ二乗検定を通して p 値が 0.05 を上回る場合、その対象は「有意差がない」となり、0.05 を下回る場合に、「有意差がある」と言うことができる。

場合、「トルコ語とドイツ語半々」という項目が最も多い割合を占めている。

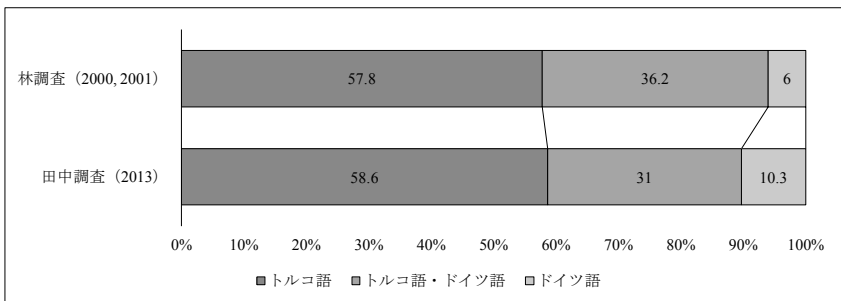
表 9: 回答者が家族に対して使用する言語



林調査では家族間での使用言語の調査の際に、「祖父」と「祖母」を対象として省いている。そのため比較も、「父親」、「母親」、「兄弟」、「姉妹」の4項目のみが可能である。

まずは話し相手が「母親」の場合である。表 10 はパーセンテージでの比較だが、ここでは林調査と本調査のあいだに、使用言語に関してほとんど差を見出すことはできない。

表 10: 母親に対して使用する言語の推移



さらに林調査で出た人数と本調査で出た人数をカイ二乗検定に掛けると、次のような数値が導き出された。

$$\chi^2 \text{ 値} = 0.8044$$

$$p \text{ 値} = 0.6688 < \text{有意水準 } \alpha = 0.05$$

すなわち、カイ二乗検定を行っても、12年のあいだで母親に対する使用言語に推移はないといえる。

次に見るのは、話し相手が「父親」の場合である。

表 11: 父親に対して使用する言語の推移

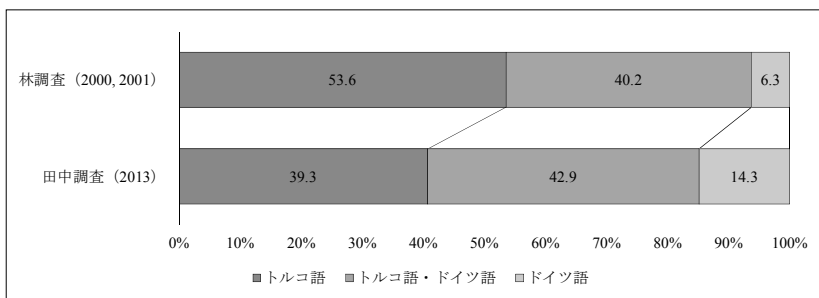


表 11 を見ると、一見両者のパーセンテージに差があるように見える。林調査と比較して本調査では、回答者の父親に対するドイツ語使用が、6.3%から 14.3%へと増加しているように見える。反対に、父親に対するトルコ語の使用は 12年のあいだに 53.6%から 39.3%へと減少しているように見える。

しかし、カイ二乗検定を行うと、結果は異なってくる。

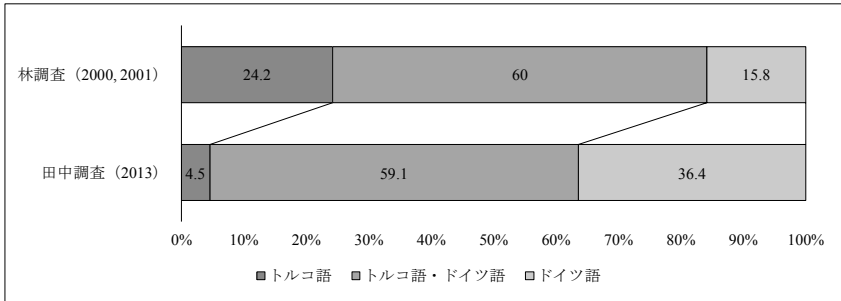
$$\chi^2 \text{ 値} = 2.3804$$

$$p \text{ 値} = 0.3042 < \text{有意水準 } \alpha = 0.05$$

すなわち、12年のあいだで父親に対する使用言語に大きな推移があるとはいえない。

さらに、話し相手が姉妹の場合である。

表 12: 姉妹に対して使用する言語の推移



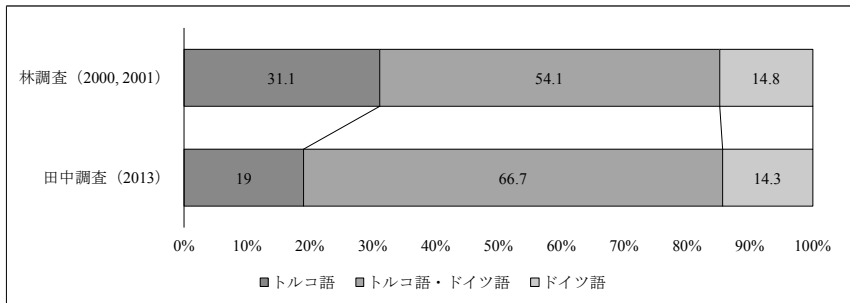
この場合は、パーセンテージを見ても違いが明らかである。回答者の姉妹に対するトルコ語の使用が 24.2%から 4.5%へと減少し、その代わりにドイツ語の使用が 15.8%から 36.4%へと増加している。カイ二乗検定を行って確認しても、ここには有意な差がある。

$$\chi^2 \text{ 値} = 6.4601$$

$$p \text{ 値} = 0.03955 < \text{有意水準 } \alpha = 0.05$$

すなわち、12年のあいだで姉妹に対する使用言語に推移があるといえる。最後に、話し相手が兄弟の場合はどうであろうか。

表 13: 兄弟に対して使用する言語の推移



ここでは、パーセンテージで見ても両調査に大きな差異は見られない。カイ二乗検定に掛けても、その結果は同様である。

$$\chi^2 \text{値} = 1.2483$$

$$p \text{値} = 0.5357 < \text{有意水準 } \alpha = 0.05$$

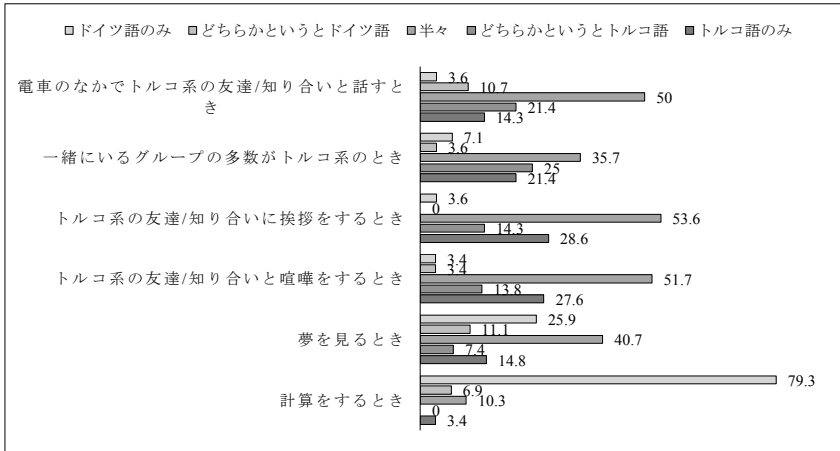
すなわち、12年の間で兄弟に対する使用言語に推移はないといえる。

回答者が家族に対して使用する言語を分析してみたところ、話し相手が姉妹の場合にのみ、使用言語に推移が見られることが分かった。具体的には、ドイツ語使用率の増加である。これは、トルコ系移民の女性のドイツ語使用頻度が増加しているためだと考えられる。そこで、本調査の回答を男女別に分け、男性と女性で言語使用に違いが見られるのかを分析した。カイ二乗検定を行った結果、男性も女性もほぼドイツ語とトルコ語の使用頻度は同等であった。しかしそのなかでも、女性の方がドイツ語を使用していると結論づけられる項目が2点あった。ひとつは「母親と話すとき」で、もうひとつが「トルコ系の親戚と話すとき」である。すなわち本調査の結果に関して言えば、トルコ系移民の女性の方がトルコ系移民の男性と比べて、母親や親戚と話すような日常生活において、ドイツ語をより使用しているといえる。しかし言語の面だけでなく、教育の面でも同様の傾向が見られる。例えばトルコ系移民の男性と女性のギムナジウムへの進学率を比較すると、女性がギムナジウムへ進学する割合の増加の方が、男性の割合よりも高い (Siegert 2008: 25 を参照)。

4.4. 個別の状況ごとにみた言語使用

表 14 は、回答者が個別の状況ごとにどの言語を使用するかを、パーセンテージであらわしたものである。

表 14: 個別の状況ごとの言語使用



意外にも、どのシチュエーションにおいても、回答者は筆者の想像以上にドイツ語を使用していた。例えば「電車のなかでトルコ系の友達/知り合いと話すとき」や「一緒にいるグループの多数がトルコ系のとき」、さらに「トルコ系の友達/知り合いと喧嘩をするとき」のそれぞれに状況において、使用言語が「トルコ語」に寄ることを想定していた。しかしどの回答も「トルコ語とドイツ語半々」の使用が最も高い割合を占めていたのである。このことは、これらの状況があくまですべて「公の場」でコミュニケーションが行われている、ということに起因するのではないだろうか。つまり、家族と話す際は「家庭」という「私的な場」でのコミュニケーションであったが、今回質問した項目はすべて、トルコ系移民だけでなく、移民背景を持たないドイツ人の目もある「公の場」で行われるのである。そのため、トルコ系移民の若者が「ドイツ語」を使用しているのではないかと考えられる。

次に、林調査の結果と比較していく。このなかで林調査でも問われた質問は、「夢を見るとき」の言語と、「計算をするとき」の言語である。

まずは、回答者が何語で夢を見るかという問いについてである。

表 15: 夢を見る言語の推移

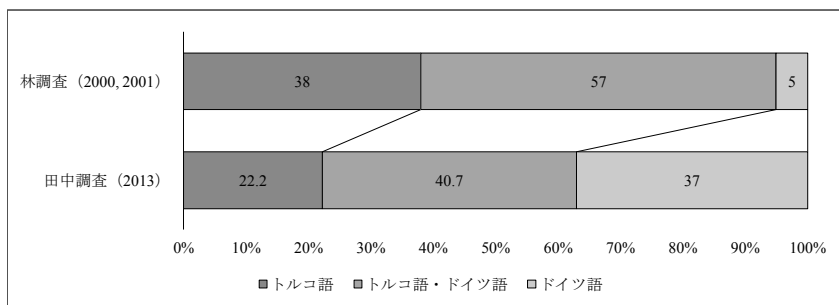


表 15 を見ると明らかであるが、12 年間で回答者が「ドイツ語」で夢を見る割合が、5%から 37%へと大きく増加している。それに伴い、「トルコ語・ドイツ語」の使用が 57%から 40.7%へ、そして「トルコ語」の使用が 38%から 22.2%へと減少している。

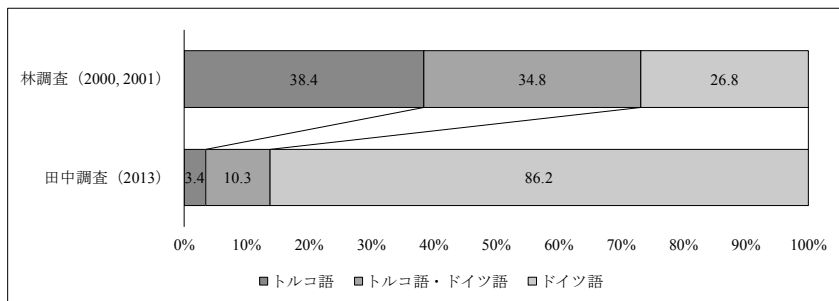
$$\chi^2 \text{ 値} = 21.0519$$

$$p \text{ 値} = 2.683 \times 10^{-05} < \text{有意水準 } \alpha = 0.05$$

カイ二乗検定でも同様の結果が見られ、12 年のあいだでトルコ系移民の若者が夢を見る言語に、推移があったことが分かる。

次に、回答者が日常生活において計算をするときに使用する言語の推移である。

表 16: 計算をするときの言語の推移



この場合は先ほどの「夢をみる言語」のケースよりも大きな変化が観察された。まずは「トルコ語」の使用が 38.4%から 3.4%とほぼ 10 分の 1 にまで減少している。続いて「トルコ語・ドイツ語」の使用も同様に 34.8%から 10.3%へと減少し、そして「ドイツ語」の使用が 26.8%から 86.2%へと増加している。このことは、カイ二乗検定を行ってもやはり同様の結果を得ることができた。

$$\chi^2 \text{値} = 33.0659$$

$$p \text{値} = 6.604 \times 10^{-08} < \text{有意水準 } \alpha = 0.05$$

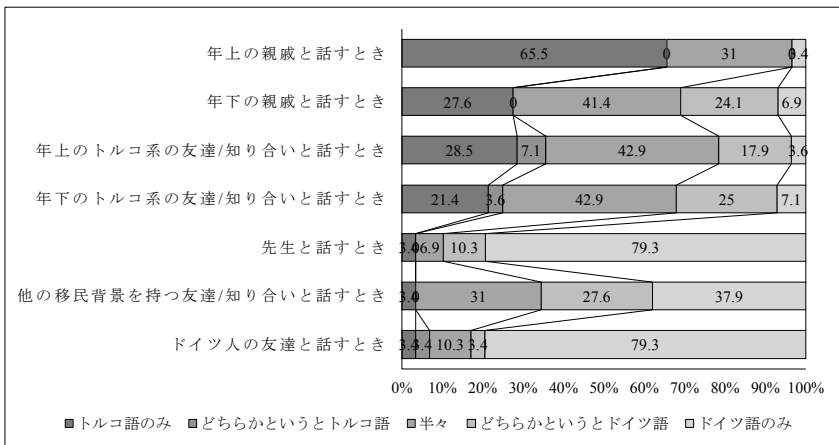
すなわち、12 年のあいだでトルコ系移民の少年少女が計算をするときの言語にも、推移があるといえる。

このように、「夢を見るとき」の言語と「計算をするとき」の言語という個別の状況に着目しても、12 年前と比べてドイツ語使用頻度の増加が目立った。

4.5. 回答者が家の外で使用する言語

最後に、回答者が家の外でそれぞれの話し相手とコミュニケーションを取る際に使用する言語である。なお、この項目は本調査が独自に行ったもので、林調査の結果と比較をする目的で設けた項目ではない。

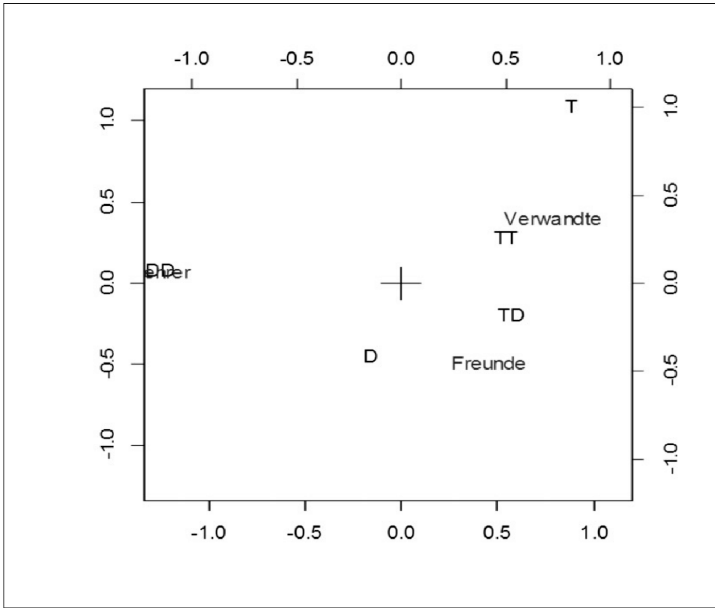
表 17: 家の外で使用する言語



まず「年上の親戚と話すとき」と「年下の親戚と話すとき」を比較すると、年上の親戚と話す時の方が、「トルコ語のみ」を使用すると回答する者の数が37.9%多かった。同様の傾向は「年上のトルコ系の友達／知り合いと話すとき」と「年下のトルコ系の友達／知り合いと話すとき」にも観察された。ここでもやはり、「年上のトルコ系の友達や知り合いと話すとき」の方が、「トルコ語のみ」と回答する者が9.1%多く、話し相手の年齢が高くなるにつれ、トルコ語の使用が増加傾向にあった。

ただし、パーセンテージを目で追っただけでは見えてこない事柄がある。それが、各質問で出た回答の相関性である。この章では、さらにコレスポンデンス分析を通して回答間の相関性を散布図で描写することにより、話し相手が異なる場合の言語使用に違いが見られるかを考察した。表18は、家の外で「トルコ系の親戚」、「トルコ系の友達／知り合い」、そして「先生」に対して、アンケートの回答者が何語で話す傾向にあるのかをあらわしている。例えば、Verwandte（トルコ系の親戚）の項目と TT（トルコ語のみ）の項目が、散布図上でかなり近い位置にあることが分かる。すなわち「トルコ系の親戚」は、「トルコ系の親戚」、「トルコ系の友達／知り合い」、「学校の教師」を話し相手とした場合に、相関的にもっとも「トルコ語のみ」の使用が見られる項目である、ということである。次に Freunde（トルコ系の友達／知り合い）を見ると、この項目が TD（トルコ語とドイツ語半々）と近い位置にあることが分かる。すなわち、回答者は話し相手が「トルコ系の友達／知り合い」の場合、より「トルコ語とドイツ語半々」を選択することが見て取れる。そして最後に、Lehrer（学校の教師）の場合である。Lehrer（学校の教師）は DD（ドイツ語のみ）とほぼ重なっており、この2項目がかなり近い相関性を所有していることが、散布図を通して明らかになった。

表 18: 家の外で話し相手により使い分ける言語



Verwandte = トルコ系の親戚、Freunde = トルコ系の友達/知り合い、Lehrer = 学校の教師
 TT = トルコ語のみ、T = どちらかというトルコ語、TD = トルコ語とドイツ語半々、
 D = どちらかというドイツ語、DD = ドイツ語のみ

このことから、家の外という「公の場」でそれぞれの相手とコミュニケーションを行う場合に、回答者と話者のあいだの心的距離が近ければ近いほど「トルコ語」を使用し、心的距離が遠くなるにつれて、「ドイツ語」の使用が増えていくことが分かった。

5. 結論

林調査と比較して、家庭内における言語使用については、12年後の本調査においても大きな変化は見られない。ただし姉妹に対する言語使用にのみ推移があり、これは、トルコ系移民の若い女性がより高いドイツ語運用能力を獲得しつつある現状と合致している。統計的にトルコ系移民の就学率が改善しつつある現状を考慮すると、ドイツ語運用能力が向上しているトルコ系移民の女性が、トルコ系移民全体の学力の底上げを行っているのではないかと推測される。

次に、具体的にどのようなコミュニケーションの状況下、あるいは話し相手の際によりドイツ語が使用されるのかと、その際に話者が持つ言語意識に着目した。例えば話す状況が「公の場」であると、話し相手がトルコ系であっても、よりドイツ語を選択する割合が高くなることが分かった。さらに林調査との比較のため、「夢をみる時」と「計算をする時」に使用する言語を観察すると、通時的に見ても、12年のあいだでドイツ語の使用が大幅に増えていることが明らかとなった。

さらに家庭外での言語使用を観察すると、話し相手との心的距離も、回答者の言語使用に大きな役割を果たしていることが分かった。回答者がそれぞれ「トルコ系の親戚」、「トルコ系の友達／知り合い」、「学校の教師」と話す際に、コミュニケーションの状況が同じ「公の場」であっても、心的距離がより近いほど「トルコ語」を選択し、話者との心的距離がより遠くなればなるほど、「ドイツ語」を使用しているのである。

全体として、12年のあいだにトルコ系の若者がよりドイツ語を使用するようになったが、その要因のひとつとして、トルコ系の女性のドイツ語運用能力が向上したことが推測される。また使用言語の選択に関して言えば、コミュニケーションの行われる場所が公的あるいは私的な空間であるか、あるいはコミュニケーションの相手とどの程度の親しい関係にあるかも背景にあると推測することができるであろう。

資料 1: 質問用紙 (ドイツ語)

Interview zu Deinem Sprachgebrauch

Herzlichen Dank für Deine Mitarbeit!

Wenn eine Frage für Dich unangenehm sein sollte, dann brauchst Du sie nicht zu beantworten. Sag mir dann dabei einfach Bescheid! Du kannst Dich darauf verlassen, dass Deine Daten nur für eine wissenschaftliche Untersuchung verwendet und nicht weitergegeben werden!

1. Über Dich

- 1) Alter: _____ Jahre
- 2) Geschlecht: weiblich, männlich
- 3) Geburtsort: Land _____ /Stadt _____
- 4) Nationalität(en): _____
- 5) Welche Schule: _____
- 6) Welche Klasse: _____ . Klasse

2. Über Deine Familie

- 1) Familienstruktur (Zu Hause): Großmutter, Großvater, Mutter, Vater,
 ältere Schwester, jüngere Schwester, älterer Bruder, jüngerer Bruder

(Wenn du weißt...)

- 2) Geburtsort Deiner Großeltern: Land _____ /Stadt _____
 - 3) Geburtsort Deiner Eltern: Land _____ /Stadt _____
 - 4) Wann sind Deine Großeltern oder Eltern nach Deutschland gekommen?
-

5) Warum sind Deine Großeltern oder Eltern nach Deutschland gekommen?

6) Wenn es dir nichts ausmacht, dann kannst Du mir sagen, was die Arbeit Deiner Eltern ist?

3. Wer macht was zu Hause?

Auswahlmöglichkeit

a) nur Großeltern, b) nur Eltern, c) Großeltern und Eltern, d) Alle in der Familie (auch Du)

- 1) Türkische Gerichte häufig zu Hause essen: _____
- 2) Türkische Zeitungen oder Zeitschriften abonnieren: _____
- 3) Türkische CDs oder DVDs haben: _____
- 4) Sich türkische Sendungen anschauen: _____
- 5) In die Moschee gehen: _____
- 6) Eine türkische Volkstracht (eine traditionelle Kleidung) haben: _____
- 7) Hochzeit auf türkische Art machen: _____
- 8) Beerdigung auf türkische Art machen: _____

4. Im Alltag

1) Welche Sprache sprichst Du? (Mehrfachantworten möglich)

Deutsch, Türkisch, Andere Sprache(n) (_____)

2) Welche Sprache ist (sind) Deine Muttersprache(n)?

Deutsch, Türkisch, Andere Sprache(n) (_____)

3) Welche Sprache benutzt Du im Alltag?

nur Deutsch, mehr Deutsch, halb Deutsch, halb Türkisch,

mehr Türkisch, nur Türkisch

4) In Bezug auf Jugendsprache, kannst Du mir bitte beibringen, was jetzt „in“ ist?

5) Kannst Du mir bitte sagen, welche Sprache Du benutzt, wenn Du...

Auswahlmöglichkeit

- a) nur Türkisch, b) mehr Türkisch, c) halb Türkisch, halb Deutsch,
d) mehr Deutsch, e) nur Deutsch

5-1) mit Deiner Großmutter redest. _____

5-2) mit Deinem Großvater redest. _____

5-3) mit Deiner Mutter redest. _____

5-4) mit Deinem Vater redest. _____

5-5) mit Deiner Schwester redest. _____

5-6) mit Deinem Bruder redest. _____

6) Kannst Du mir sagen, welche Sprache Du benutzt, wenn Du...

Auswahlmöglichkeit

- a) nur Türkisch, b) mehr Türkisch, c) halb Türkisch, halb Deutsch,
d) mehr Deutsch, e) nur Deutsch

6-1) mit Deinen älteren Verwandten redest. _____

6-2) mit Deinen jüngeren Verwandten redest. _____

6-3) mit Deinen türkischstämmigen Freunden redest. _____

6-4) mit Deinen türkischstämmigen Bekannten redest. _____

6-5) mit älteren türkischstämmigen Freunden/Bekannten redest. _____

6-6) mit jüngeren türkischstämmigen Freunden/Bekannten redest. _____

6-7) mit Deinen Lehrern redest. _____

6-8) mit Freunden mit anderen Migrationshintergrund redest. _____

6-9) mit deutschen Freunden redest. _____

7) Mit wem verbringst Du die meiste Zeit? (Mehrfachantworten möglich)

7-1) In der Schule:

mit deutschen Freunden, mit türkischen Freunden,

mit Freunden aus sonstigen Ländern

7-2) Außerhalb von der Schule:

- mit deutschen Freunden, mit türkischen Freunden,
 mit Freunden aus sonstigen Ländern

8) Mit welcher Sprache redest Du dabei?

Auswahlmöglichkeit

- a) nur Türkisch, b) mehr Türkisch, c) halb Türkisch, halb Deutsch,
d) mehr Deutsch, e) nur Deutsch

7-1) In der Schule: _____

7-2) Außerhalb von der Schule: _____

9) Kannst Du mir sagen, welche Sprache Du benutzt, wenn Du...

Auswahlmöglichkeit

- a) nur Türkisch, b) mehr Türkisch, c) halb Türkisch, halb Deutsch,
d) mehr Deutsch, e) nur Deutsch

9-1) zählst, rechnest. _____

9-2) träumst. _____

9-3) mit Deinen türkischstämmigen Freunden/Bekanntem streitest. _____

9-4) Deine türkischstämmigen Freunde/Bekannte grüßt. _____

9-5) in der Gruppe bist, deren Mehrheit türkischstämmig ist. _____

9-6) im Zug mit Deinen türkischstämmigen Freunden/Bekanntem redest. _____

5. Deine Beziehung zur Sprache

1) Bitte lies den folgenden Text einmal durch und wenn Du grammatische Fehler findest, dann unterstreiche sie und korrigiere sie ins grammatisch richtige Deutsch. Wenn Du alles richtig findest, dann brauchst Du nichts zu machen (Mehrfachantworten möglich):

(Du bist in der Stadt und triffst zufällig Deine beste Freundin/Deinen besten Freund.

Du sprichst sie/ihn an.)

Du: Hey, wo gehst du hin?

Sie/Er: Ich gehe Kino.

Du: Was gibst denn da?

Sie/Er: Da läuft „○○○(ein Film, den Du Dir auch anschauen wolltest)“ gerade.

Du: Cool, kann ich mitkommen?

Sie/Er: Ja klar, lassma zusammen gehen!

2) Der Unterricht ist gerade beendet und Dein Lehrer spricht Dich an und sagt, dass er jetzt Deine Hilfe braucht. Aber Du musst dringend nach Hause gehen und sagst ihm daher ab. Falls du dazu noch was sagen willst, bitte wähle die Antwort(en) von der folgenden Liste:

Lehrer: Wenn du jetzt kurz Zeit hast, könntest du mir bitte helfen?

Du: (Nachdem du ihm absagst) (Mehrfachantworten möglich)

- Schweigen.
- Dich entschuldigen.
- Deinem Lehrer versprechen, ihm das nächste Mal zu helfen.
- Grund sagen, warum Du ihm nicht helfen kannst.
- Deinem Lehrer jemanden anderen vorstellen, der ihm eventuell helfen könnte.

6. Zum Schluss

1) Willst Du in der Zukunft Deine Türkischkenntnisse für Deine Arbeit benutzen?

Ja, Nein

2) Was ist Dein Traum(-beruf)?

3) Was denkst Du, wo Du Dich in 20 Jahren befindest?

in Deutschland, in der Türkei, in sonstigen Ländern ()

Vielen Dank!

資料 2: 質問用紙 (日本語訳)

あなたの言語使用に関するインタビュー

ご協力ありがとうございます。もし回答したくない質問がある場合、すべての質問に回答する必要はありません。その場合は、気軽に教えてください。記入された個人情報、学術的調査のためにのみ使用され、第三者に伝わることはありません。

1. 自身について

- 1) 年齢: _____ 歳
- 2) 性別: 女性、男性
- 3) 出生地: 国 _____ /都市 _____
- 4) 国籍 (複数可) : _____
- 5) 学校名: _____
- 6) 学年: _____ 年生

2. 家族について

- 1) 家族構成 (家にて): 祖母、祖父、母親、父親、
姉、妹、兄、弟

(ご存じの場合)

- 2) 祖父母の出生地: 国 _____ /都市 _____
- 3) 両親の出生地: 国 _____ /都市 _____
- 4) あなたの祖父母あるいは両親は、いつドイツへ来ましたか?

- 5) なぜあなたの祖父母あるいは両親は、ドイツへ来ましたか?

- 6) もし差し支えない場合は、あなたの両親の仕事を教えてくださいか?

3. 誰が家で何をしているか？

選択肢

a) 祖父母のみ、b) 両親のみ、c) 祖父母と両親、d) 家族全員（あなたを含め）

- 1) トルコ料理をよく家で食べる：_____
- 2) トルコの新聞や雑誌を購読している：_____
- 3) トルコの CD や DVD を持っている：_____
- 4) トルコの番組を見る：_____
- 5) モスクに行く：_____
- 6) トルコの民族衣装を持っている：_____
- 7) 結婚式をトルコ風に行う：_____
- 8) 葬式をトルコ風に行う：_____

4. 日常生活において

1) どの言語を話しますか？（複数回答可）

ドイツ語、トルコ語、他の言語（ _____ ）

2) どの言語が母語ですか？（複数回答可）

ドイツ語、トルコ語、他の言語（ _____ ）

3) どの言語を日常生活において使用しますか？

ドイツ語のみ、どちらかというドイツ語、ドイツ語とトルコ語半々、

どちらかというトルコ語、トルコ語のみ

4) 今流行っている若者ことばを教えてください。

5) 以下の場合、どの言語を使用しますか？

選択肢

a)トルコ語のみ、b) どちらかというトルコ語、c) トルコ語とドイツ語半々、

d) どちらかというドイツ語、e) ドイツ語のみ

5-1) 祖母と話すとき _____

5-2) 祖父と話すとき _____

5-3) 母親と話すとき _____

5-4) 父親と話すとき _____

5-5) 姉妹と話すとき _____

5-6) 兄弟と話すとき _____

6) 以下の場合、どの言語を使用しますか？

選択肢

a) トルコ語のみ、b) どちらかというとトルコ語、c) トルコ語とドイツ語半々、

d) どちらかというとドイツ語、e) ドイツ語のみ

6-1) 年上の親戚と話すとき _____

6-2) 年下の親戚と話すとき _____

6-3) トルコ系の友達と話すとき _____

6-4) トルコ系の親戚と話すとき _____

6-5) 上のトルコ系の友達/知り合いと話すとき _____

6-6) 年下のトルコ系の友達/知り合いと話すとき _____

6-7) 先生と話すとき _____

6-8) 他の移民背景を持つ友達と話すとき _____

6-9) ドイツ人の友達と話すとき _____

7) 誰ともっともよく時間を過ごしますか？（複数回答可）

7-1) 学校: ドイツ人の友達、トルコ人の友達、他の国出身の友達

7-2) 学校の外: ドイツ人の友達、トルコ人の友達、他の国出身の友達

8) 7)の友達と話す際、どの言語で話しますか？

選択肢

a) トルコ語のみ、b) どちらかというとトルコ語、c) トルコ語とドイツ語半々、

d) どちらかというとドイツ語、e) ドイツ語のみ

7-1) 学校: _____

7-2) 学校の外: _____

9) 以下の場合、どの言語を使用しますか？

選択肢

- a) トルコ語のみ、b) どちらかというトルコ語、c) トルコ語とドイツ語半々、
d) どちらかというドイツ語、e) ドイツ語のみ

9-1) 計算をするとき _____

9-2) 夢を見るとき _____

9-3) トルコ系の友達/知り合いと喧嘩をするとき

9-4) トルコ系の友達/知り合いに挨拶をするとき

9-5) 一緒にいるグループの多くがトルコ系のとき

9-6) 電車のなかでトルコ系の友達/知り合いと話すとき _____

5. 言語との関わり合いについて

1) 下記の会話文を読み、もしも文法的な誤りを見つけた場合、該当箇所に下線を引き、正しいと思われるドイツ語に直してください。もしもすべて正しいと思う場合は、直す必要はありません（複数回答可）：

（あなたは街で偶然、あなたの最も親しい友達に遭遇しました。あなたはその親友に話し掛けます。）

あなた: Hey, wo gehst du hin?

親友: Ich gehe Kino.

あなた: Was gibst denn da?

親友: Da läuft „○○○(ein Film, den Du Dir auch anschauen wolltest)“ gerade.

あなた: Cool, kann ich mitkommen?

親友: Ja klar, lassma zusammen gehen!

2) 授業が終わったとき、先生があなたに、あなたにあることで手伝ってくれないかと頼みます。でもあなたは、急いで家へ帰らなくてはならないため、先生の頼みを断らなくてはなりません。もし断る際に他に何か言いたいことがある場合は、下のリストから該当する回答を選んでください（複数回答可）：

先生「もし今時間が少しあったら、手伝ってくれるかな？」

あなた: (断ったあと) (複数回答可)

黙る

謝る

次は手伝うと先生に約束する

なぜ手伝えないのか、その理由を説明する

先生に、手伝えそうな他の誰かを紹介する

6. 最後に

1) 将来的に、トルコ語の知識を仕事に役立てたいですか？

はい、 いいえ

2) 夢（の職業）は何ですか？

3) 20年後は、自分がどこにいると思いますか？

ドイツ、 トルコ、 その他の国()

ご協力ありがとうございました。

参考文献

- Androutsopoulos, Jannis (2001): „Ultra korregd Alder!“ Zur medialen Stilisierung und Popularisierung von ‚Türkendeutsch‘. In: *Deutsche Sprache* 4/2001, S. 321-339.
- 林徹 (2001) 「トルコ語ドイツ語二言語使用の少年少女たちが『夢の中で話す言語』」〔『東京大学言語学論集』第20号、347-364頁〕。
- 林徹 (2003) 「ふたつの祖国」〔『月刊言語』第32巻6号、36-42頁〕。
- 林徹 (2008a) 「ベルリンのトルコ語」〔『月刊言語』第37巻4号、98-102頁〕。
- 林徹 (2008b) 「交差することば、葛藤する人々」〔GCOE セミナー『コンフリクトの人文科学』(2008年3月8日開催)の資料〕。
- 国立教育政策研究所 (2013) 『OECD 生徒の学習到達度調査－2012年調査国際結果の要約』文部科学省。
- Mattheier, Klaus J. (1998): Kommunikationsgeschichte des 19. Jahrhunderts. Überlegungen zum Forschungsstand und zu Perspektiven der Forschungsentwicklung. In: Cherubim, Dieter/Grosse, Siegfried/Mattheier, Klaus J. (Hg): *Sprache und bürgerliche Nation: Beiträge zur deutschen und europäischen Sprachgeschichte des 19. Jahrhunderts*. Berlin/New York: de Gruyter, S. 1-45.
- Siegert, Manuel (2008): *Schulische Bildung von Migranten in Deutschland*. Nürnberg: Bundesamt für Migration und Flüchtlinge.
- Statistisches Bundesamt (2014a): *Bildung und Kultur. Allgemeinbildende Schulen. Schuljahr 2013/2014*. Wiesbaden: Statistisches Bundesamt.
- Statistisches Bundesamt (2014b): *Bevölkerung und Erwerbstätigkeit. Ausländische Bevölkerung. Ergebnisse des Ausländerzentralregisters*. Wiesbaden: Statistisches Bundesamt.
- Statistisches Bundesamt (2014c): *Bevölkerung und Erwerbstätigkeit. Bevölkerung mit Migrationshintergrund. Ergebnisse des Mikrozensus 2013*. Wiesbaden: Statistisches Bundesamt.

(たなか・しょうた 学習院大学大学院人文科学研究科博士後期課程)

Das Sprachbewusstsein bei türkischstämmigen Migranten im gegenwärtigen Deutschland

Ermittelt aufgrund einer Umfrage unter Jugendlichen

SHOTA TANAKA

Die größte Gruppe der Ausländer in Deutschland ist die der Türken. Das Deutsch der türkischstämmigen Migranten wird von den Deutschen ohne Migrationshintergrund oft als „gebrochenes Deutsch“ (Androutsopoulos 2001: 330) wahrgenommen und stigmatisiert. Aber die Deutschkenntnisse der türkischstämmigen Migranten verbessern sich allmählich, was u.a. am steigenden Prozentsatz der türkischstämmigen Schüler, die das Gymnasium besuchen, zu sehen ist. Im Rahmen dieses Aufsatzes möchte ich mithilfe einer Umfrage aufzeigen, was für ein Sprachbewusstsein türkischstämmige Jugendliche, die im Vergleich zur ersten Einwanderergeneration ihre Kenntnisse der deutschen Sprache verbessern konnten, von ihrem Sprachgebrauch haben.

Erste Studien über den Sprachgebrauch der türkischstämmigen Jugendlichen legte Hayashi (2001, 2003 und 2008) vor, in denen er die Ergebnisse einer Umfrage vorstellte, die er vom 18. Dezember 2000 bis zum 9. Januar 2001 in einer Gesamtschule in Kreuzberg durchgeführt hatte. In seiner Arbeit ging es ihm darum aufzuweisen, welche Selbsteinschätzung türkischstämmige Jugendliche ihren Sprachkenntnissen geben. Als Fazit stellte er fest, dass die Jugendlichen, die sich mehr an die deutsche Gesellschaft anpassten, dazu neigten, auch mehr Interesse für die türkische Sprache aufzubringen.

In dem vorliegenden Aufsatz werde ich von folgenden zwei Fragestellungen ausgehen: 1. Kann man, im Vergleich zu den Ergebnissen von Hayashi vor 12 Jahren, einen Wandel im Sprachgebrauch bei türkischstämmigen Jugendlichen beobachten? 2. Wenn ein Wandel zu beobachten ist, was sind dann seine Bedingungen und wie drückt er sich im Bewusstsein der Menschen aus?

Um das herauszufinden, führte ich vom 8. bis zum 19. März 2013 in Jugendzentren in Berlin, Hamburg, Mannheim und Ludwigshafen und in einer Realschule in Köln eine Reihe von Umfragen durch, und zwar mit türkischstämmigen Jugendlichen im Alter von 12 bis 23 Jahren, die entweder die Haupt-, Real- und Gesamtschule besuchten oder auf das Gymnasium gingen. Insgesamt sammelte ich 50 Fragebögen und davon waren 30 Fragebögen als Material verwendbar. Von den Befragten waren 21 männlich und 9 weiblich. Diese Zahl ist für eine genauere Untersuchung niedrig, weshalb die vorliegende Arbeit als eine Pilotstudie anzusehen ist.

Der Fragebogen stand sowohl in Deutsch als auch in Türkisch zur Verfügung, aber den türkischen Fragebogen wählte nur ein Befragter, d.h. 3.3% aller Befragten. Im Gegensatz dazu wählten 53.4% aller Befragten bei der Umfrage von Hayashi den türkischen Fragebogen. Mithilfe des Chi-Quadrat-Tests (χ^2 -Tests) von R, einer freien Programmiersprache, konnte ich die Veränderungen statistisch errechnen.

Das erste Ergebnis meiner Untersuchung bezieht sich auf den häuslichen Sprachgebrauch, d.h. welche Sprache verwenden die Befragten, wenn sie mit ihren Familienmitgliedern reden. Im Fragebogen gab es fünf Möglichkeiten: „nur Türkisch“, „mehr Türkisch“, „halb Türkisch, halb Deutsch“, „mehr Deutsch“ und „nur Deutsch“. Die Befragten konnten eine Option auswählen. Durch den Chi-Quadrat-Test wurde deutlich, dass sich der Sprachgebrauch der Befragten zwischen Vater, Mutter und Bruder innerhalb von 12 Jahren nicht verändert hatte, sehr wohl aber der Sprachgebrauch unter den weiblichen Geschwistern. Die Befragten verwenden mehr Deutsch unter ihren Geschwistern und insgesamt verwenden die weiblichen Befragten mehr Deutsch als die männlichen. Dieses Ergebnis bestätigt jene statistischen Daten, wonach mehr türkischstämmige Frauen der jüngeren Generation im Alltag Deutsch verwenden und häufiger aufs Gymnasium gehen als die türkischstämmigen Männer.

Das zweite Ergebnis betrifft den Sprachgebrauch in der jeweiligen Kommunikationssituation. Entgegen meiner Vermutung war die Option „halb Türkisch, halb Deutsch“ die am meisten gewählte Antwort in Bezug auf die Kommunikation außerhalb der Familie. Aber diese Kommunikation findet in der Öffentlichkeit statt und im Gegensatz zur Kommunikation zuhause, neigen türkischstämmige Jugendliche häu-

figer dazu, in der Öffentlichkeit die deutsche Sprache zu verwenden. Auch anhand von zwei Fragen über den „Sprachgebrauch im Traum“ und den „Sprachgebrauch beim Zählen“, deren Antworten mit den Ergebnissen von Hayashi vergleichbar waren, konnte ich bestätigen, dass die Befragten nach 12 Jahren mehr Deutsch verwendeten.

Das dritte und letzte Ergebnis betrifft den Sprachgebrauch außerhalb der Familie mit unterschiedlichen Kommunikationspartnern. Durch die Korrespondenzanalyse von R, die ein Streudiagramm darstellt und eine Korrelation zwischen mehreren Kategorien zeigt, wurde deutlich, dass die Befragten, korrelativ betrachtet, am meisten „nur Türkisch“ mit ihren türkischstämmigen Verwandten verwendeten. Im Umgang mit türkischstämmigen Freunden oder Bekannten verwendeten sie am meisten „halb Türkisch, halb Deutsch“ und mit ihren Lehrern am meisten „nur Deutsch“. Bei der Kommunikation in der Öffentlichkeit wechselten die Befragten je nach der sozialen Distanz zum Kommunikationspartner die Sprache.

Als Fazit lässt sich feststellen, dass türkischstämmige Jugendliche häufiger Deutsch verwenden als noch vor 12 Jahren. Das liegt meines Erachtens erstens an der Verbesserung des Bildungsniveaus der türkischstämmigen Frauen und Mädchen, zweitens an der jeweiligen Kommunikationssituation (öffentlich oder privat) und drittens an der sozialen Distanz zum Kommunikationspartner.